

【「みんなの食堂」運営モデル実証業務 事例紹介】

実施団体名	青森市立沖館小学校教育振興会（会長 中村伸吾）（青森市）
実施年度	令和2年度
実施概要	青森市立沖館小学校児童、保護者、地域住民を対象とした「みんなの食堂」を開催した。

1 青森市立沖館小学校教育振興会について

当会は、青森市立沖館小学校の児童の保護者と会の趣旨に賛同する有志を会員とし、沖館小学校に在学する児童の教育活動が円滑に行われるよう支援して、児童の健全育成を図ることを目的に設立された組織である。

会員から徴収した会費で、図書や部活動に必要な物品の購入支援を行っているほか、児童、保護者及び地域住民を対象とした食育活動（食農体験会、調理講座等）等も実施している。

2 「みんなの食堂」開設のきっかけ

小学校を活用した地域づくりのため、学校を会場に、児童とその保護者、更には高齢者を含む地域住民が参加する「食」を共にするイベントを行って、子どもと大人が価値観を共有できる居場所を作りたいと考え、「みんなの食堂」を開設した。

3 「みんなの食堂」の概要

青森市立沖館小学校児童、保護者、地域住民を対象とした「みんなの食堂」を開催した。

（令和2年度：3回開催（5回予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で2回中止となった。）

(1)参加対象

青森市立沖館小学校児童、保護者、地域住民

(2)参加料

子ども無料、大人有料（200円の参加料を徴収）

ただし、収穫・加工体験は、1人当たり410円。

(3)周知方法

学校を通じて児童・保護者に開催通知を配布。

(4)運営方法

①開催通知は、学校の協力を得て配布。

②運営スタッフ：振興会会員のほか、児童の保護者、放課後児童課員の支援員

③食材は主に購入したものを使ったが、スタッフが栽培した野菜も提供してもらった。

収穫体験は、地元農家から畑を提供してもらい、スタッフが協力して栽培した野菜の収穫を兼ねて実施した。

(5)開催日及び参加人数

	日 時	場 所	参加者
1	令和2年9月26日(土) 10:00~12:30	沖館小学校 家庭科室	25名(子供24名、大人1名)
2	10月11日(日) 10:00~12:30	ふれあい農園 (青森市四戸橋)	8名(子供4名、大人4名)
3	11月15日(日) 10:00~12:30	沖館小学校 家庭科室	15名(子供7名、大人8名)

(6) 各回の内容

【第1回】 9月26日(土) 10:00~12:30 参加者数：25名(子供24名、大人1名)

テーマ：2種類のオリジナルカレー作りに挑戦！

内容：参加児童が、ポークカレーとキーマカレー作りに挑戦。トッピングとして、揚げ野菜と型抜きハンバーグも作ったほか、あらかじめ用意したパン生地を好みの形に整えてパンを焼き上げ、カレーと一緒にいただいた。

メニュー：ポークカレー、キーマカレー、揚げ野菜、ハンバーグ、パン

スタッフ：振興会会員3名、放課後児童会指導員2名



調理実習の様子

【第2回】 10月11日(日) 10:00~12:30 参加者数：8名(子供4名、大人4名)

テーマ：そばうち体験と昼食会

内容：青森市四戸橋の「ふれあい農園」において、ふれあい農園職員の指導のもと、そば打ち体験を行った。そば打ちの後、スタッフが作ったかき揚げと自分たちで打ったそばを、自家製の温・冷のつゆで試食した。

メニュー：そば、かき揚げ、持参したおにぎり

講師：ふれあい農園職員 佐藤勝江氏、沼田春美氏



そば打ち体験の様子

【第3回】 11月15日(日) 10:00~12:30 参加者数：15名(子供7名、大人8名)

テーマ：アツアツおでんをいただきます。

内容：おきだて農園で収穫した大根、かぶ、春菊、白菜、キャベツを材料に、アツアツおでん、浅漬け、和え物に調理して、出来たてをいただいた。

メニュー：おでん、春菊のゴマ和え ほか

講師：あおもり食命人 柿崎 和江 氏

スタッフ：振興会会員 2名



調理実習の様子

【その他の活動】

「みんなの食堂」の活動ではないが、「みんなの食堂」にも参加した児童と保護者に呼びかけて、スタッフが種から植えて、水やり・虫取りをした野菜の収穫体験を行った。

実施日：令和2年11月7日（土）

内 容： 地域住民が提供してくださった畑「おきだて農園」において、大根、かぶ、春菊、白菜、キャベツの収穫体験を行った。

指 導：おきだて農園オーナー 柿崎 正規 氏



収穫体験の様子

(7) 新型コロナウイルス感染症対策

参加者を把握できるように事前予約制とし、連絡先を把握して、何かあった場合にすぐに連絡がとれるようにした。また、当日はマスク着用と検温・手指消毒を実施した。

4 参加者からの感想

（そば打ち参加者より）

そば打ち、とても楽しかったようです！施設の周りも自然がたくさんで、時間があったら遊んで帰りたかったです。利用料金？もとても手頃だし、子どもと一緒に食育ができるのに、なぜみんな参加しないのかすごく不思議です。来年度も予定が合えば絶対参加したいです！

（おでんづくり参加者より）

家庭で親子で料理するとなると、時間や状況的な部分で、ゆっくり、丁寧に料理を教えてあげることがなかなかできないので、「みんなの食堂」を通して食育、料理の基礎を改めて親子で学べる良い機会となりました。

リクエストとしては、よくある家庭料理を教えていただけると、子どもに料理のお手伝いをお願いし易くなるし、自己流になっている料理に新たな発見があって面白いかと思います。（個人的には魚料理を習いたいです。青森で獲れた魚…）：企画、準備等進めて下さった皆様、本当にありがとうございました。

(野菜の収穫体験参加者より)

野菜収穫を体験して感じたことがあります。1つ目は野菜を子どもたち自らの手で収穫できたことです。土に触れることがほとんどない子どもたちは、野菜といえばスーパーの店頭で並んでいるものと考えます。今回、畑の栄養で大きく成長した野菜を見てそれを収穫できたことは貴重な体験だったと思います。この体験で食のことはもちろん、環境についても考えるきっかけになったと思います。2つ目は多くの人と交流が持てたことです。親子の時間を過ごす良い機会になりました。今回のイベントで他学年の子どもたちと知り合うことができました。また、子どもたちも家族以外の大人との接点がありませんが、色々な大人の様子を見ることが出来たのは非常に良い経験になったのではないかと思います。今回のイベントは、子どもたちや親にとっても大変有意義なものとなりました。来年度も子どもたちに貴重な体験ができる機会を与えていただきたいと思います。

(原文のまま掲載)

5 まとめ・今後の課題

- (1) 当初、地域住民の方にも参加していただく予定だったが、コロナ禍での学校を会場としたイベント実施にあたり、参加人数及びその対象・会場等内容を変更して開設することとなり、児童及びその保護者に参加者を限定したため、地域の方々とのつながりを持つことが出来なかった。
- (2) 児童対象のイベントは、行動の把握や調理指導に人員と手間がかかることが分かり、対象を児童だけでなく、児童及びその保護者に変更し、一緒に調理してもらうことにした。また、保護者とのクッキング形式や専門講師による指導のもと実施されることが、調理実習の円滑な実施に必要な要素であることが実感できた。
- (3) 次年度以降も活動を継続するには、助成金を財源とした活動ではなく、食材と活動資金の提供先を工夫して見つけ出すことが必要だと感じた。また、本年度は、振興会会員が主な運営スタッフとして活動したが、「みんなの食堂」は、地域として継続して実施していくことが必要な活動であることを周知して認知してもらい、地域住民を含め、共に活動できる協力者を求め、育成していくことも重要である。
- (4) 次年度以降は、地域の農家やスーパー等に食材提供をお願いしたり、保護者に呼びかけて、家庭で余っている食材の提供を呼びかけ、食材を確保することも検討したい。
また、地域住民に提供していただいた畑「おきだて農園」で、スタッフ、児童、保護者が協力して野菜栽培を継続し、食農体験の場と食材の確保を行いたい。
- (5) 運営スタッフの確保方法として、沖館小学校児童の保護者、地域住民の他、青森市社会福祉協議会に依頼して、地域福祉サポーターへの協力呼びかけが考えられる。また、会長が「子どもの居場所づくりコーディネーター」であることから、コーディネーターのつながりを活用した募集も今後検討したい。
- (6) 助成金以外の財源確保のため、振興会の年間行事として広く保護者に周知し、振興会の会費より講師料並びにコロナ感染症対策等費用として、運営費の一部を賄うことができるよう学校側と協議していきたい。
- (7) 本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、計画通りの活動はできなかったが、開催方法を工夫しながら、可能な範囲で、「みんなの食堂」を開催し、学校を会場とした地域の異年齢交流事業として、また児童と保護者をはじめ地域住民の食育推進を図るため、更には年代を超えて地域住民が「食」を通してつながる活動を継続していきたい。
- (8) 沖館小学校が6年後150周年を迎えるにあたり、計画的に保護者と地域住民とのコミュニケーションを図りながら、「みんなの食堂」事業を通して150周年を地域のお祭りとしたイベントの企画や運営ができる人材を育てる。また災害が発生した場合の避難所として小学校の家庭科室を中心とした食事の提供や食材のストック等、定期的に学校を活用した事業を行うことで「人と物」が連動しスムーズな災害支援活動につながることを目的として活動を継続していく。